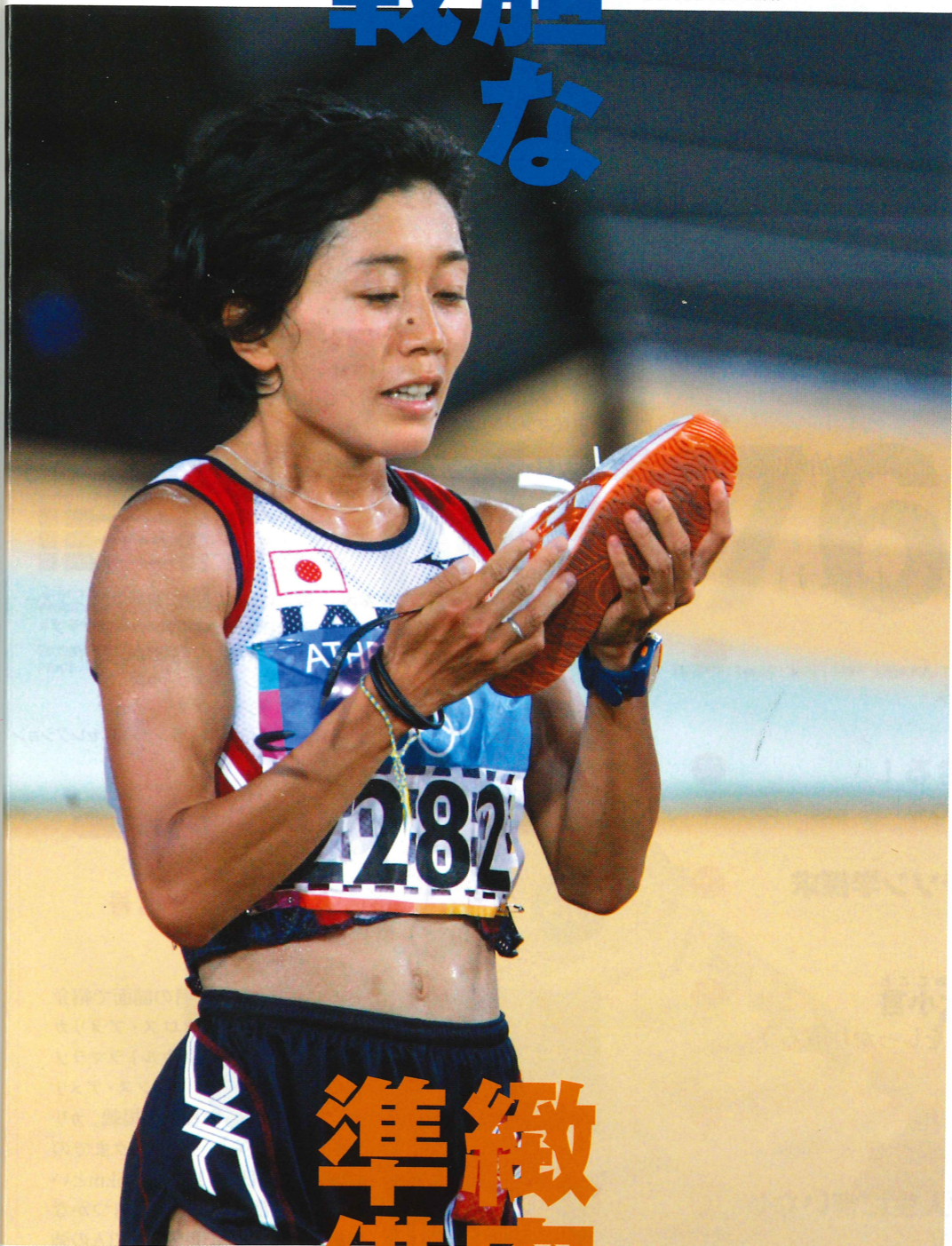




金 哲彦

Tetsuhiko Kin

作大胆な 戦戦



準備密な 準備

増田明美

Akemi Masuda

対談 野口の勝因を 改めて語る

野口みずき選手の金メダルを筆頭に、女子は全員入賞、男子も2名が入賞するなど、五輪史上、最高の成績を収めたニッポンのマラソン果たしてこの流れは、今後も続くのか？アテネの勝因、世界の流れ、日本の課題について金哲彦さんと増田明美さんが熱く語る

写真/北川外志廣、フォト・キシモト

精神的にも体力的にも
タフだった野口選手

金 ● まず女子マラソンですが、あの日はとにかく暑くて、日中の体感温度は40℃ぐらいでしたから、選手はこんな中を走ること、気の毒になりました。

増田 ● 私はレース4日前の同時刻にスタートラインに立って、実際にコースを少し走って見たのですが、西日が強くて、暑いだけではなく肌も痛い。しばらく走ると、思考が薄れていく感じがしたので、レースでは帽子が必要だと思いました。ですから、当日スタート地点の映像を見た時、帽子を被らない選手が多いなか、野口選手はしっかりと帽子を被っていたことが印象的でした。

金 ● 日差しが強いので、走ると日射病のような感覚になる。とにかく今回の女子マラソンは、レース中やゴール後に嘔吐する選手が多かったように、それだけ過酷なコンディションだったということです。

増田 ● 藤田監督は「野口の強さは内臓が強いこと」と、口癖のように言うんです。その野口選手ですら、レース後は医務室で10分間くらい横になっていましたからね。でも、こういうコンディションの中で勝つたというところは、特別な意味がありますよね。

金 ● そうですね。まず2時間20分前後の持ちタイムのランナーが揃う中で勝つためには、力があることと、ちゃんとした準備が必要です。こうした前提を踏まえた上で、今回のレースでは、精神的にも肉体的

にもタフでなければ勝てなかったでしょうね。事前には起伏を走る技術とか、下りのスピードとか言われてましたが、最終的には一番タフだった野口選手が勝つたという印象が強いですね。

増田 ● 身体は小さいのにね。沿道で声援を送っているギリシャの人たちも、野口選手がトップで走って来るのを見て、アレっという感じで、しばらく拍手を忘れて背中を見送っているシーンが何度かありましたが、「こんな小さな選手がトップなの？」という驚きがあったのだと思います。

金 ● 我々も勝つと予測はしていましたが、本当に勝って、改めて野口選手は強いな！という感じですね。

万全の準備で臨んだ 日本の指導者の緻密さ

増田 ● 先ほど、金さんはきちんと準備しておくことが前提とおっしゃいましたが、その点では、日本の指導者の力も大きかったと思います。監督やコーチの緻密さは世界一でしょう。

金 ● それは間違いないですね。野口選手の走りはストライドが大きいので、平坦や上りは問題なくても下りになるとブレーキが大きい。記者会見で本人も下りが苦手だと言っていました。「その対策もしてきた」と自信を持って発言していた。

増田 ● 野口選手は、スイスのサンモリッツでの練習で、最初10km上ってから10km下り、5km上ってから5km下りと、上ってダメージがあるなかで、下りの練習をしていました

ね。

金 ● レースを見ていて感じたのは、ラドクリフ選手や男子のテルガト選手もそうでしたが、クロスカントリーに取り組んで、起伏が得意なはずの選手が、下りの走りがおかしくなっていた。結局は、下りの上手い下手もあつたけど、上りのダメージを少なくするのもポイントだったんでしょうね。そして、野口選手は、ラドクリフ選手が万全かもしれない状況のなか、自分が得意とする上りの25km地点で仕掛ける、という大胆な作戦がズバリ的中しましたね。

増田 ● 正直な話、日本選手は何度も下見したり、準備し過ぎではないかと心配だったんです。というのも、今回2位だったヌデレバ選手は、7月に取材した時「コースに対するチャレンジ精神がなくなってしまうから、私は1回も試走しない」と言うので、目の前に大きな坂が現れたらどうするのですか？と聞くと、「それは自分で変えることができなから、どうしようもないでしょう」と平然と答える。ひょっとしてアテネのような厳しい条件では、このぐらい大きく構えている選手のほうが強いかもしれないと思つた。でも結果は、野口選手のスタートのタイミングについて、藤田監督が「あの地点から先でも後でも勝てなかっただろう」と言っているように、試走を含めた緻密な準備が金メダル獲得につながっています。

金 ● ヌデレバ選手がコースの試走をしながらも大丈夫だと言っているのは、本番よりキツイ場所での練習しているという自信があったからだと思います。日本の女子選手もやはり、海外合宿などで、本番以上にキツイ

2人がアテネの街を走った印象は？



増田：日差しが強く、暑いというよりも、痛いという表現の方がピッタリくる気がします。少し走るだけで思考能力が全くなくなってしまうような錯覚を感じ、選手はよくこんな中を走るなと思いました。

金：日陰はそれなりに涼しいのですが、日なたの暑さは半端ではありませんでした。たとえゆっくりペースでも、日中はランニングには向きませんね。

場所練習してきた。そういう環境は、残念ながら国内にはなかなかない。今回、海外で練習をやった成果には、高地トレーニングという点だけではなく、本番のコースに耐えるタフさを身につけるという狙いもあった。逆に言えば、本番よりキツイ場所練習してこなかった選手は、力があっても勝負できなかったと思います。

増田 ● そうですね。それから、今回、取材して感じたのは、海外の選手は、コーチが恋人だったり夫であったり、パートナーと一緒に大会に臨んでいる。一方、日本の選手は実業団という組織に所属して、家族的にやっている。野口選手が「自分で走っているのではない。皆で走っている」と言っているように、走るのには一人だけど、一人じゃない。そういう組織力の強さがメンタルでのタフさを生んでいる部分もあると思います。何と言っても日本の女子マラソンは全員が入賞ですからね。

金 ● これはすごいことです。土佐選手も坂本選手もメダルには届きませんでした。が、ベストを尽くした結果で、後悔はしていないと思います。

増田 ● 土佐選手がスタジアムに入ってきた時、一番、泣けたなあ。ジワッとときちゃった。野口選手のように最後までパワフルではなくて、「帰ってきました」「みたいな、全身にやってきました」が現れているような走りでしょう。それから、坂本選手については、武富監督にレース後話を聞いたら「やっぱり疲れが抜けきってなかったかな」と言っていました。坂本選手は、この1年半で4回マラソンを走っているんです。いくら若い

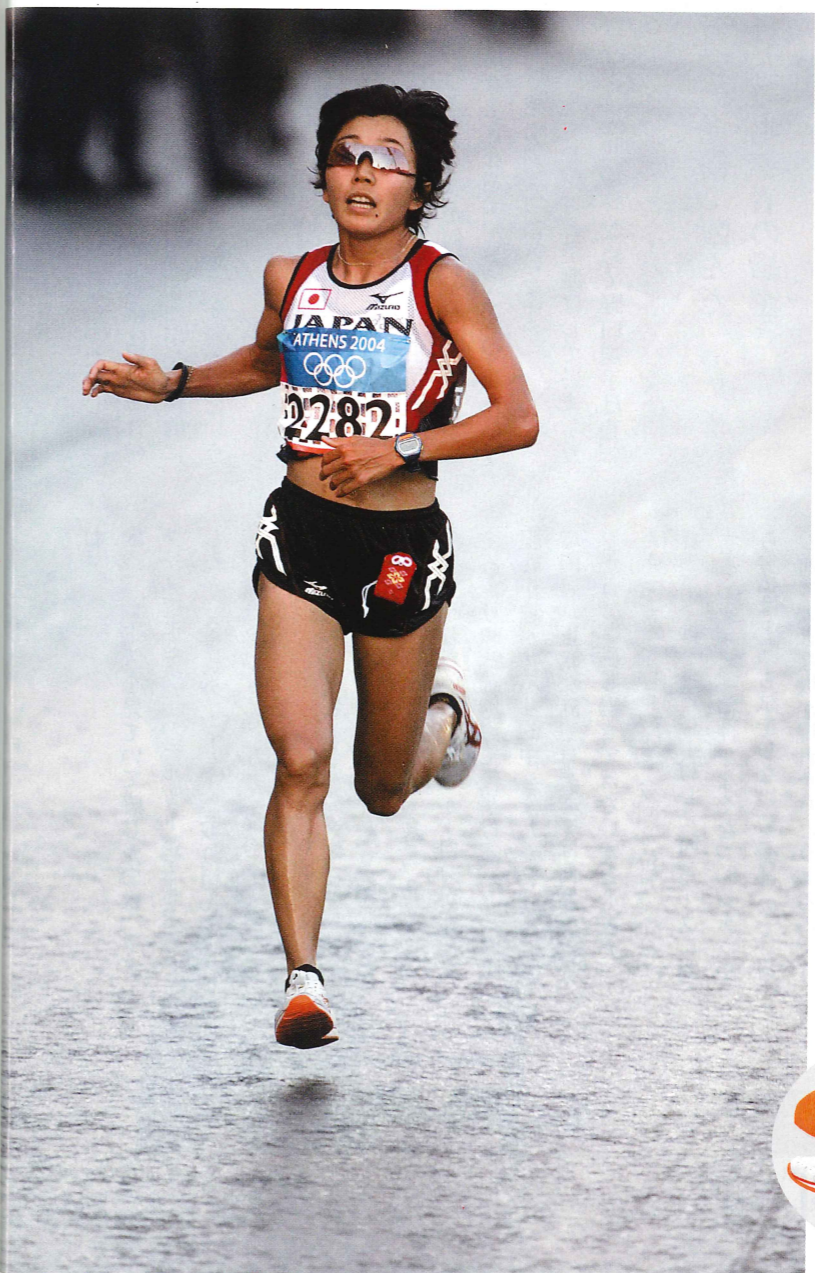
と言っても、今回は厳しい条件だっただけに、本当なら疲れを完全にとってからのトレーニングに入りたかった。でも、課題が分かっていてということ、北京につながるということですね。

金 ● そう。本人もレース直後のインタビューで「北京を目指す」と言っていた。あれだけハードなレースの後ですから、普通は「少しゆつくり休んで」と言うでしょう。すぐに気持ちを切り替えている点は、すごいと思います。好感を持ちました。4年間というスパンは何が起きるか分かりませんが、スター選手になると、レースに出過ぎて故障してしまうケースも多いので、その点に注意すれば大丈夫だと思います。

女王ラドクリフ選手が止まってしまった理由……

金 ● 今回、日本の最大のライバルと言われていたラドクリフ選手は、力を発揮できませんでした。

増田 ● これまでラドクリフ選手が世界最高記録を出すシーンなどを見てきましたから、自分の目を疑いましたよ。でも、次元は違うけれど、私、すごくあの気持ちわかる。**金** ● 増田さんも、ロサンゼルスオリンピックの時、止まった経験があるものね。ラドクリフ選手は、イギリスのメディアから勝つて当然という扱いを受けていたようですか



アテネの道路には大理石が混じっているため、アウトソールには、もみがらを入れるなどの対策がほどこされている。右の写真は、野口選手が使用したシューズのベースモデルとなった「マラソン ソーティ JAPAN (14175円)」

ら、プレッシャーがかかり過ぎていた。あの途中棄権は一種のパニックですよ。

増田 ● 記録をどんどん更新している時点で、トップでない自分というのは、あり得ないわけですね。自分でもトップじゃないことが許せない。そうすると、身体がキツイとかじゃなくて、自分でも原因はわからないけど、止まっちゃう。ダメかと思うと、自然に止まっちゃう。

金 ● ラドクリフ選手も「自分が何をしていたか、わからない」と言っていましたよ。

増田 ● だいぶたってから客観的に振り返ると、「あの時は走る前から良い結果だけを求めていた」とわかる。でも直後は自分に何が起きたのか全くわからない。だからこそ、ラドクリフ選手は精神的なダメージがすごかったはずなのに、短時間で気持ちを切り替えて、1万mのスタートラインに立ちました。私は、その彼女の気持ちの強さに、あらためて感服しました。結局、1万mも途中棄権でしたが、マラソンの途中棄権のまま終わらなかったのは、彼女自身が一番満足していると思います。

金 ● 女子の1万mの時、競技場ではラドクリフ選手の名前の「ポーラー！ ポーラー！」というコールが起きてましたよ。あの声援は、マラソンであんな状態だったにもかかわらず、1万mのスタートラインに立ったことに、観客全員が敬意を表したんでしょうね。

今後マラソンでの日本の活躍は続くのか？

増田 ● 男子マラソンは現地の放送センタ

ーで観ていたのですが、陸上が専門外の方が「男子は残念だったね」とおっしゃるので、私は「とんでもない。男子の5位、6位といえば、女子のメダルと同じくらいの価値がありますよ」と言っただけです。

金 ● 確かに男子の入賞はバルセロナ以来ですから評価できます。ただし、ペーサーカーのいない勝負優先のレースで、起伏も激しく、気象条件が厳しかったからこそ日本の男子が闘えた部分もあるんです。アフリカ勢は高地に住んでいますから、暑さが得意なわけではありませんし、海外の選手の多くはプロ選手ですから、走りやすい気象条件で、起伏も少なく、スピード化している都市マラソンで結果を残すことが生活の基盤になっている。日本の選手のように、実業団に所属して、オリンピックに照準を絞って、出場レースを絞るといいうわけにはいきませんからね。そういう意味では、男女を問わず、オリンピックや世界選手権のマラソンでは日本選手は有利です。

増田 ● 女子ではトラックの1万mで中国の選手が優勝しましたが、今後はマラソンでも中国が強力なライバルになってくると思います。去年あたりから標高2300mのドバ高原という場所、有望な選手を集めてナショナルチームを作って強化に取り組んでいますね。

金 ● 女子もこれからスピード化が進んで、北京オリンピックまでには、日本人選手も含めて2時間20分を切る選手がどんどん出てくるでしょうね。男子のようにトラックでの基本的なスピードで差がついてしまうと、これからキツイ部分はありますね。

増田 ● そうですね。アフリカ勢も増えてくるでしょうし、世界が強くなっていく流れはありますよ。ただ、野口選手が今回、35日間で1350km走り込んだように、日本選手のような厳しい練習が果たして海外の選手にもできるのかな、とも思うんです。

金 ● 日本人はマラソンが好きだし、最も注目される種目だからね。マラソンを観る人のほとんどが、スポーツというよりも、選手の内面性を含めてドラマのようにマラソンを観ている。

増田 ● そう。今回、「オリンピックはあなたにとって何ですか？」と女子選手に聞くのと、「表現の場です」という答えが返ってくる。男子選手からは「表現の場」という答えは全く返ってこない。男性はスポーツの「闘いの場」という気持ちが強いんだろうけど、女性は「表現の場」と考えている。高橋尚子選手もそうでしたが、女子マラソンという種目が「華のある表現の場」である以上、自分を出し尽くすために、厳しいトレーニングにも耐えられるし、これからは大勢の有望な選手が出てくるだろうと思う。

金 ● 他の国が、そこまで女子マラソンに価値を見出すかということ。

増田 ● そう。私は、そこにも期待したいですね。

金 ● なるほどね。いずれにしても、走ることで生活していける選手がこれほど大勢いる国はないですから、日本の選手は恵まれていますよ。だからこそ、選手には高いモチベーションを持って欲しいし、日本のマラソンには、これからは期待したいですね。

アテネ五輪中・長距離、マラソン成績一覧

男子	女子
●800m	●800m
1 ユーリー・ホルザコフスキー(ロシア) 1:44:45	1 ケリー・ホームズ(イギリス) 1:56:38
2 ムブレニ・ムラウジ(南アフリカ) 1:44:61	2 ベンハシ(モロッコ) 1:56:43
3 ウィルソン・キブケテル(デンマーク) 1:44:65	3 ヨランダ・チエブラク(スロベニア) 1:56:43
●1500m	杉森美保(1次予選2組6着=落選) 2:02:82
1 ヒシャム・エルゲルージ(モロッコ) 3:34:18	●1500m
2 パーナード・ラガト(ケニア) 3:34:30	1 ケリー・ホームズ(イギリス) 3:57:90
3 ルイ・シルバ(ポルトガル) 3:34:68	2 タチアナ・トマシヨワ(ロシア) 3:58:12
●5000m	3 マリア・チオンカン(ルーマニア) 3:58:39
1 ヒシャム・エルゲルージ(モロッコ) 13:14:39	●5000m
2 ケネニサ・ベケレ(エチオピア) 13:14:59	1 メセレト・デファル(エチオピア) 14:45:65
3 エリウド・キプチョゲ(ケニア) 13:15:10	2 イザベラ・オチチ(ケニア) 14:48:19
●1万m	3 ティルネッシュ・ディババ(エチオピア) 14:51:83
1 ケネニサ・ベケレ(エチオピア) 27:05:10	
2 シレシ・シヒネ(エチオピア) 27:09:39	
3 タデッセ(エリトリア) 27:22:57	
19 大野龍二 29:06:50	
●3000mSC	
1 エゼキエル・ケンボイ(ケニア) 8:05:81	
2 ブライミン・キプルト(ケニア) 8:06:11	
3 コエチ(ケニア) 8:06:64	
岩水嘉孝(1次予選3組6着=落選)	
●マラソン	
1 ステファノ・バルディーニ(イタリア) 2:10:55	
2 メブ・ケフレジギ(アメリカ) 2:11:29	
3 バンデルレイ・デ・リマ(ブラジル) 2:12:11	
5 油谷 繁 2:13:11	
6 藤訪利成 2:13:24	
42 国近友昭 2:21:13	